

第3回

国際比較調査

「都市社会の子どもたち」

—ストックホルム・ハルビン・サクラメント・東京—

第3回

国際比較調査

「都市社会の子どもたち」

—ストックホルム・ハルビン・サクラメント・東京—

目次

要約	4
はじめに	12
1. 調査対象都市	14
●ストックホルム	14
●ハルビン	16
●サクラメント	18
2. 家族と生活圏をめぐって	21
●家族のかたち	21
●学校まで	25
3. 生活リズムを追って	26
●起床から登校まで	26
●朝食の風景	27
●夕食から就寝まで	28
●空腹感をめぐって	31
4. 子どもの放課後	32
●昨日、友だちと遊んだか	32
●テレビ視聴	33
●お手伝い	37
5. 一日の楽しさ	38
6. 親子関係	42
●どのくらい心配してくれるか	42
●ゼイタクさせるか	44

7. 学校での勉強	51
●学校への行きしぶり	51
●勉強机の有無	54
●勉強時間	55
●教科の好き嫌い	57
●成績の自己評価	60
●勉強の得意な理由	62
8. 将来像	64
●大学進学希望	64
●つきたい仕事	66
●将来の見通し	69
9. 子どものしあわせ感	71
●自己評価	71
●基調にある気分	74
●しあわせ感について	77
●成長欲求の強さ	78
10. 性差をめぐって	80
●男の子・女の子の生き方	80
●性別の持つ意味	83
11. 学業成績	87
●自己評価との関係	87
●将来との関係	89
資料1 調査票見本	94
資料2 国別集計表	105

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

国際比較調査(3)

「都市社会の子どもたち」

ーストックホルム・ハルビン・サクラメント・東京ー

静岡大学教授 深谷昌志
東京学芸大学教授 深谷和子

*調査協力者 (敬称略)

スウェーデン

山下 泰文

(東海大学文学部北欧文学科教授)

Åke Pettersson

(マルメ教育大学講師)

Karl-Erik Olsson

(Rosenfeldtskolan学校)

アメリカ

Dr. Riles

(前カリフォルニア州教育長)

中国

王 軍

(黒竜江省人民代表大会常務委員会副主任)

李 力

(東京学芸大学大学院生)

武素元

(東京学芸大学大学院生)

要 約

I サンプル概要

1) 今回の国際比較調査は、1988年、1990年に次いで3回目である(表1・2・3)。今回は、とくに福祉の先進国スウェーデンおよび厳密な一人っ子政策が実施されている中国の子どもの成長を明らかにすることがわれわれの主たる関心であった。その結果とあわせて、これまでに得られた韓国、台湾、タイ、ニュージーランドの子どもたちの調査結果をも参照しながら、広く今日の子どもの成長の上に関わりつつある問題を探ることをねらいとしている。

2) 今回の調査のサンプル構成は表1の通りである。これまでと同様、小学校5年生を対象とし、4か国にまたがる9都市の約3,400名にアンケート調査が行われた。今回新たに、スウェーデン語版、北京語版の調査票が作成されたが、その作成と調査の実施にあたっては、東海大学北欧文学科の山下泰文氏と東京学芸大学大学院生・武素元、李力氏および現地の研究者や小学校の先生など多くの人びとの協力を得た。

II 家庭を手がかりに

1) 家族

①どの地域も家族は小型化し、少子化傾向にある。しかしアジアでは祖父母との同居率が高く、親と同室で寝ている子の割合も高い。(表4・5・6・7・8)

②サクラメントでは朝ご飯の欠食率が高く、朝から学校給食を利用する子もいる。屋台で食事する習慣のあるバンコク、タイペイでは自宅外で朝食をとる子がいるが、サクラメントとは事情が違う。西欧文化圏の国々の子のデータの中に家庭の不安定さの影が見える。

それに比べると東京の家庭の朝の食卓は健康だが、夕食を家族全員で食べる割合は8地域の中で最低で、父親だけが不在の食卓は39%、ソウルの29%と共に他を抜いて高く、世界からの働きすぎの指摘を思い出す。夕食の孤食率はストックホルムとオークランドに高い。

なお、東京やソウルの孤食率も比較的高いが、これは家庭の問題ではなく通塾が影を落としているのであろう。(表11・12・15・16)

2) 子どもの放課後

①ハルビンを除いては複数テレビの時代が来ている。視聴時間はストックホルムとサクラメントが2時間を超え、逆にハルビンは22分と今の時代では考えられないほど少ない。そのハルビンですら、昨日テレビを見た子は6割に達するが、しかし一人っ子の社会にもかかわらず「毎日見る子」が25%と低いのはなぜだろう。(図4、表18・19・20・21)

②放課後に友だちと遊ぶ子は、日本ばかりでなく、どこでも少ない。多くてサクラメントの5割、ストックホルム3割、ハルビンでは15%でしかない。ストックホルムでは、昨日友だちと遊んだ子でも、少人数としか遊んでいない。予備調査で、ストックホルムの校長が「テレビゲームの流行に親が無関心で困る」と嘆いていたのを思い出す。子どもの健全育成問題も今や地球規模になっていることを思わせられる。(図2・3)

③手伝いをしていないのは、東京とストックホルムの子である。東京以上に勉強

しているソウル、一人っ子で過保護のハルビンですら、東京の子よりは手伝っているのに。(表22)

3) 親子関係

①ハルビンの親子関係には、一人っ子問題が如実に現れている。自分のことを親が心配してくれると感ずる割合は、ハルビンが最高で、ストックホルムが最低である。例えば風邪で熱が出たとき、「親がとても心配してくれる」と答えた子はハルビンで83%、ストックホルムではわずか17%である。(表25、図6)

②物質的な過保護ぶりもみられ、食べたいおかずについて親が自分のわがままを「きいてくれる」と答えた子は、ハルビン39%、ストックホルム17%である。ただし、これらの項目には、経済レベルや文化の問題も関わっていそうである。(表26、図7)

③父母の評価については、西欧文化圏では調査がむずかしいため、東京とハルビンのみで比較した。父母ともにハルビンの子どもの両親評価は信じられないほど高い(表27、図8)。またハルビンでは父親より母親が「やさしい、あたたかい」等の母親特性ばかりでなく、「頼れる、尊敬できる」等のどちらかといえば、父親特性に関しても高い評価を与えられている。「頭がいい」もほぼ数値は同じである。東京の両親評価もかなり接近しているが、「頭がいい」のは断然父親と思われており、社会が性役割から抜けきれていない状況が反映している。(表28)

④人間関係の中で、受け入れられない感じを強く持っているのは東京の子である。親>先生>友だちという順で受け入れ感があるのは両地域とも共通だが、ハルビンの子は人間関係の中での安定感が大きいと推測される。(表29、図9)

4) 性役割

これまで2回の調査からも言えることだったが、東京の女の子たちはなぜか他に類のないほど性役割を強固に受け入れている。

①表45は男子の手伝い率を女子の手伝い率で割って算出した性役割受容指数だが(注:指数が100を超せば男子のほうが手伝っており、100を切れば女子がより手伝っている)、ストックホルムでは「部屋の掃除、皿洗い、夕食の手伝い」で指数が100を超え、これらの手伝いを毎日する子は、男子に多い。ハルビンの男子は「夕食の買い物、部屋の掃除、夕食の手伝い」をよくしており、その他も指数は100に近い。サクラメントでは「庭や玄関の掃除」が専ら男子の仕事なのかもしれない。しかし東京の指数は40台から80台までで、100を超える項目は1つもない。その指数の低さ(女子のみが手伝っている状態)は異様に感じられる。(表45)

②自己評価も同様で、「とてもあてはまる」の数値を用いて自己評価の性差を検討してみると(注:指数が100を超えれば女子のほうに評価が高い)、ストックホルム、サクラメントでは男子よりむしろ女子が自分に自信を持っており、ハルビンの子もそれに次ぐ。ストックホルムの女子は男子より「スポーツがうまく、勇気があり、人気があって、勉強ができて、親切」、サクラメントの女子は「スポーツのうまさや勇気の点では男子にかなわないが、親切で、正直、よく働き、勉強も同じくらいできる」、ハルビンの女子は「スポーツは男子にかなわないが、親切で、正直で、よく働く、勇気もそれほど劣らない」、しかし、東京の女子はあらゆる面で、男子に比べ自信がない。とくに勉強の面での指数は38にすぎない。ストックホルムの128、サクラメントの101、ハルビンでも低いとはいえ、61である。東京の女の子はどうしてこんなに自信がないのか。(表47)

③将来の見通しに関しても同様だ(表48)。100を超える指数は東京にはまったくない。ストックホルムとサクラメントは4個、ハルビンでも2個の項目で100を超

えている。とくにストックホルムの女子は、男子より「金持ち、有名人になる、仕事で成功する」と強く思っている。サクラメントでは男女差が少なく、ハルビンの女子は「皆から好かれる、よい親になる」点で男子を超えている。

東京の女子は、ストックホルムの女子が355、278と高い指数を示した「金持ち、有名人になる」の項目がとくに低く、37、31であり、その他の項目でも数値は最低である。

④将来の結婚観もきわめて保守的で（表43・44、図24・25）、「結婚後も仕事を続ける」とする女子は、わずか32%。ハルビン85%、ストックホルム82%、サクラメント67%と比べても極めて低く、男子の保守的結婚観という受け皿に支えられている。結婚後に共働きの妻を望む男子は、ハルビン86%、ストックホルム72%、サクラメント53%に比べ、わずか36%でしかない。働くことが、必ずしも生きがいのためではなくて経済条件が関与しているとしても、これでは東京の意欲的な女子にはつらいだろう。

Ⅲ 学校の機能を中心に

1) 学校生活

①朝、学校へ行きたくないと思う割合は、西欧文化圏の子に多く、アジアの子には少ない。東京の子はちょうどその中間にいる。（表30、図10）

また一日の楽しさを学校生活の中で探してみれば、表23に示したように、昼休みと体育の授業がどの地域でも楽しいと感じられており、算数の授業や宿題は共通に下位にある。しかしその中では、ハルビンの子の算数、宿題の位置が比較的上位にあるのが目をひく。学校がまだ子どもにとって価値と魅力を持っている社会なのであろう。

②勉強時間に関しては、アジアの子が長く西欧文化圏の子が短い（表31、図12）。

東京は92年調査で58分と短い、とびぬけて高い通塾率(図13)を勘案しなければならない。勉強機の有無(図11)をみると、東京が97%と高率であり、勉強への集中が浮かび上がる。西欧文化圏の子の勉強機の所有率の低さは、貧しさの反映ではなく、いわば文化の問題だろう。

2) 自己像

①自己評価をみると、全体として sacrament、ハルビンの子の自己像が明るく、東京の子のそれは暗い。ハルビンの子が「正直、親切、よく働く」の側面で高いのは、社会の持つ価値観の特質であろう(表39、図20)。こうした自己像の内容は子どもの中にある将来像にも反映すると予想される。

子どものつきたい仕事の中で、医師、裁判官、芸術家を抜き出してみると、東京とストックホルムの子に、なりたいものの割合が低い(図18)。また将来の見通しをみると、sacramentとハルビンの子の持つ見通しは全体に明るく、仕事での見通しの明るさも特徴的だ(ハルビンの子が金持ちになる予想が低いのは、中国の特殊事情であろう)(表38、図19)。ストックホルムの子は、仕事への意欲はきわめて低いが、しあわせな家庭、よい親への自信を持っている。しかし東京の子は、仕事、家庭いずれの見通しも暗い。

②しかし将来の見通しや自己像が暗くてもしあわせ感はまた別で、しあわせ感はアジアに強く、西欧文化圏に少ない。東京はちょうど中間にある(表41)。毎日がつまらない感情も同様である。(図21)

3) 学業成績

①東京の子の見通しの暗さは、学業成績の自己評価の低さによるものだろう。(表33、図15)


②表49によれば、どの地域でも学業成績が悪くなれば自己像は暗くなる。しかし東京の子の自己像は、成績が悪いと、とくに暗くなる。ハルビンの子の自己像は、成績が悪くてもそれほど影響を受けない。

さらに将来つきたい仕事をみると、サクラメントとストックホルムの子は成績によってそれほど「いい仕事につけない割合」が下がらない。東京の子は下がり方が大きく、成績の重みが大きな役割を果たしている（表51、図27）。将来の見通しも同様である。（表52）

③以上の背景には、学力が何に左右され決定されるかの学力観についての考え方の違いがあると思われる。ハルビンの子は先生の話をよく聞けば勉強が得意になると信じており、サクラメントでは生まれつき能力に差があると思っている子も多い。長時間勉強すればいいと思う子は東京に最も多い。（図16）

④アジア、とくにハルビンの子は未来に夢を持ち、早くおとなになりたいと思っている。西欧文化圏、とくにサクラメントとストックホルムの子は今は楽しく、いつまでも子どものままでいたいと思っている。東京の子はどっちつかずである。そうした背景の1つとして、サクラメントの子は小学生のうちから表53のように、仕事を持っている者が36%を占め、子どもなりに充実した日々を送っている資料も得られている。

⑤日本の子どもの22%は「小さい頃に戻りたい」と思っている（表42）。そして図23によれば、東京に限らず、ソウルやタイペイなど受験競争が激しく、過教育状況のもとで生活している子どもたちが「小さい頃に戻りたい」と思う割合が高い。現在はむろんのこと、未来も見通しが暗いので、小さい頃に戻りたいという気持ちになるのであろう。



はじめに

国際比較調査も今回で3回目を迎えることになった。

第1回(1988年)のアメリカ、韓国、台湾、そして第2回(1990年)のアメリカ、ニュージーランド、タイに続いて、今回は新たにストックホルムとハルビン、すなわちスウェーデンと中国を加えることができた。

お隣の中国は近いようでいて、ある意味で極めて速くに位置し、接触のむずかしい国だ。一人っ子政策が徹底して行われ、少子化問題に悩む国々では中国での子どもの成長に関心を寄せている。われわれもかねてからベキンを次の調査地と定め、少しずつ準備を進めていた。直接のアプローチを開始したのは、数年前のことになる。

国際比較調査のむずかしさは、信頼できる調査の引き受け先の確保である。まず接触のルートを探し、研究者的関心をもった調査協力者を探す。むろん研究者そのものであることが多い。われわれの調査が調査会社に委託する調査と違う点は、われわれが自分から現

地に乗りこみ、子どもや教師の協力を得て、プリテストや会合を重ね、手作りの形で調査票を作っていく点にある。それだけに、現地でアレンジしてくれる協力者の存在が大事になる。しかし、国や県などが行う何億、何千万円の調査とはまったく違い、福武書店という一企業が、営利の目的を離れて支出しているファンドによる調査である。会社としてはかなりの出費をしてくれているのはたしかだが、相手に払える謝礼におのずと限度がある。というより、欧米人の感覚からすればビジネスというよりボランティアの精神で研究に加わってくれているように思う。

しかし、いつも強力な調査協力者が見つかるのは、研究者たちが研究者的関心をこのプロジェクトに寄せてくれるからだ。その代わりに、結果は彼らが自国でどのように使用してもいいという約束だ。こうして得られたデータは、他の社会の子どもの成長と自国の子どもの成長との比較の中に、多くの示唆を生み出し、たぶんそれぞれの国で子ども理解が深

められ、教育を通して、または行政施策に反映されて子どもの福祉の向上や健全育成に役立っているに違いない。

ペキンはその意味で2回のトライアルに失敗した。第1回は天安門事件の発生だ。準備段階で天安門事件が発生し、3本の調査ルートを確認して万に備えたが、最終的には「ペキンで調査を行うことは可能だが、データを国外で発表することは禁止」という情報が入り、関係者に迷惑のかかることを懸念して断念した。2回目は調査票の印刷も終わり航空券を購入した夜、正確には深夜、FAXの音で目覚めた。「ソビエトの崩壊によって中国政府が国民の思想教育を徹底する方針を打ち出したので、今回は断念してほしい」との内容だった。航空券を払い戻した。

そして今回、ペキンを断念してハルビンに対象地域を変更したことで、やっと調査に成功した。今年は日中国交回復20周年にあたり、友好ムードに支えられたこともあり、むしろ多くの中国側の友人や知人の協力もあってのことだ。

集められた500を超える調査票は、2回に分けて大切に日本に持ち帰られ、いつものようにデータ処理が行われた。その1つ1つの数字は、この歳月の苦心を背景にしているだけに、われわれに特別の感慨をもって迫ってくる。

次にスウェーデン調査だが、これもまた長い間のわれわれの夢の1つであった。社会福祉の先進国スウェーデン。それぞれの社会を

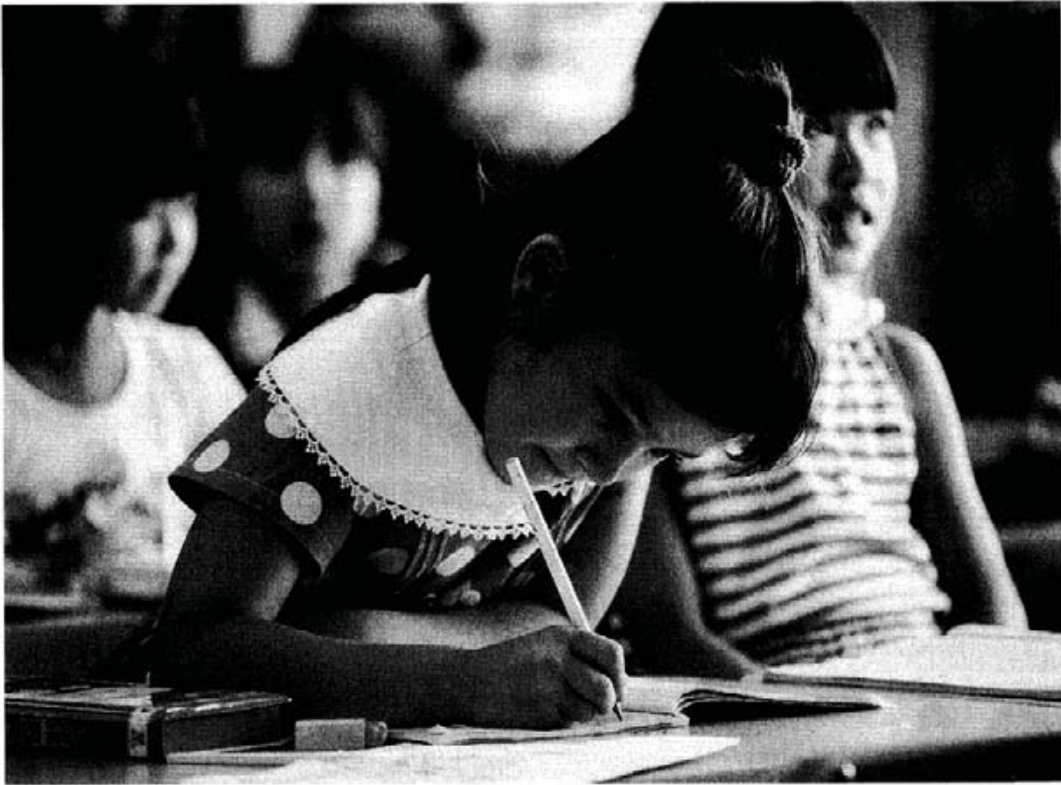
人間の発達段階に例えれば、未熟だが可能性を秘めた青年期段階の社会、勢いにあふれ生産性の高い成人期段階の社会、安定と共にややかげりの見えはじめた中年期の社会、そして円熟と衰退の同居する老年期の社会、——日本はこの50年の間に青年期から成人期へ、そしていま中年期に入りかけた社会ではなかろうか。

スウェーデンは、いうまでもなく人の中高年期をイメージさせる社会福祉の先進国である。老後の心配のない国。老後どころか明日の生活の心配をしなくてすむ国。性的平等の達成された国、性役割から大きく自由な国。若者や未婚の人びとは性からも自由な国。そこで成長する子どもたちは、青年期や成人期の社会で成長する子どもたちと意識や行動上どのように違っているのだろうか。そして幸運にも北欧文学の研究者山下泰文氏という知己を通してもう一つの夢も実現した。

データを処理してみると、ストックホルムとハルビンの子どもの意識や行動は、まさに好一対を成している印象を受ける。それらの間では東京とサクラメントのデータがかすんでしまった感じも受けるが、これまで毎回必ず日本とアメリカの調査も加えてきたという意味で、この2つの国の調査は定点観測の役割を果たしていると考えることができそうだ。

前書きが長くなったが、調査対象都市の概要を紹介した後、データの読み取りに入ることにしよう。

1. 調査対象都市



●ストックホルム)))

スウェーデンの首都ストックホルムは日本と時差8時間。成田から飛行機で11時間。遠い国である。

スウェーデンはヨーロッパの北部、いわゆる北欧とよばれる国々の1つである。面積は日本より25%も多いが、人口はわずか830万人。人口密度は日本の約20分の1。日照時間は短く、全体として寒冷だ。冬の平均気温は平均マイナス4度から5度。夏(7月)でも平均17度という涼しさだ。日照時間は6時間。子どもが登校する午前8時前後はまだ暗く、下校する3時頃はもう暗い。家庭ではもちろん、学校の職員室でさえも、色とりどりのローソクが置かれ使われている。炎のゆらぎはこうした日の光の少ない暮らしの中で、何と魅力

的だろう。

だから野菜が不足し、ホテルの豪華バイキングの朝食ですら、赤いピーマンと皮の固い小さなトマトと、巨大なキュウリくらいしか置かれていない。客はテーブル上のナイフで、それらを大切に2片か3片スライスして、自分の皿に入れる。安価なのはニシンの種々なマリネ、スモークサーモン。

経済体制は資本主義。今世紀初めまでは農業国だったが、現在は自動車、コンピュータなど技術関係の輸出が盛んで、農業(酪農・畜産)に従事する人びとはごくわずかである。

1960年代後半からスウェーデン社会は大きく変わりはじめ、人びとの言葉の端々にそれがでてくる。権威や秩序に支配された教育は、

自由と平等を尊重する教育に、そして社会全体の参加と平等を中心に再構成された。今日スウェーデンは男女平等が徹底し、性役割から制度的にも個人的にも極めて自由な国である。それは1980年に国連の「女子差別撤廃条約」を他の国々に先がけて批准したことからも明らかだ。他の西洋の国々と同じように長い間この国も男性支配の社会であったが、1970年代から20年ほどの間に信じられないくらい大きな様変わりを見せたのである。

税制、教育、労働の各領域でも急速に改革が行われた。また教育や福祉の充実はいうまでもない。現在小学校（基礎学校）から大学までのあらゆる学校が無料であり、医療も無料、児童手当、住宅手当、疾病保険、両親保険、失業保険、年金保険等々が完備している。出産後もほとんどすべての女性は有給の育児休暇をとるが、多くは1年以内に職場に戻る。専業主婦という言葉とコンセプトはこの国では無きに等しい。

しかし多彩で極めて高率の税金が課せられ、また、3～5割の売上税も課せられ、旅行者は物価の高さにへきえきする。病気や育児、老後にパーフェクトに近い保障とサービスが行われるにせよ、この高率の税金は人びとの勤労意欲にどう響いているのだろうか。

医学部など一部の学部を除けば、大学はほとんど希望者が皆入学できる。むろん入学は簡単だが卒業がむずかしいのは、欧米の大学に共通だ。しかし、スウェーデンの場合、大学を出ても出なくても、どんな種類の職業についても、収入の点ではほとんど差がないという。

小学校から大学までは月謝は無料だし、大学への入学は高校の12科目の成績を全て同じウエイトで換算し、その合計点で決める、という大まかなやり方だ。それで大した不満が出ないのは、競争率が低いからこそだろう。能力に関係なく誰でも入れ、入れれば苦労だけが待っていて、卒業してもとくに収入が増加するわけでなければ、本当に学問が好きな人間以外は大学に魅力を感じないだろう。おま

けに学問もまったく形成されず、「○○大学を出たというのは何の意味もなく、大学で○○を専攻したことが問われるのです」と人びとは言うのである。

さて今回の調査地域の1つはマルメ。ストックホルムからは飛行機で1時間。海をへだてたコペンハーゲンからは、水中翼船でわずか45分。スウェーデン第三の都市で、スカンジナビア半島の南端に近いところにあり、1546年に建てられたルネッサンス風の市庁舎を中心に、静かで美しい町である。そしてもう一つの調査地点カールスクルーナは、マルメから電車で3時間。古い小さな地方都市である。

全校で120人のローゼンフェルト小学校の校長は、陽気でハンサム。子どもたちに絶大な人気があって、彼が歩きながら子どもに「ヘイ（ハローの意味）」と小さく手を挙げると、子どもたちは実にうれしそうな顔で「ヘイ」と答える。今回調査校集めに奔走してくれた校長は、地域の学校とスウェーデンの教育事情についてこう語ってくれた。

「1週間の授業時数は1年生が20時間、2、3年が24時間、4年が34時間、5、6年は35時間。授業科目には宗教、FA（自由選択の労働で、図書の整理とか家政、写真、環境問題など）、他にスレイド（木工と手芸、家庭科の被服もこれに入る）があるのが特徴でしょうか。また英語学習は4年生からですが、1年生から始める動きも出てきています。成績？——学期末に口頭で先生が言うだけで、1960年代の改革で通知表は廃止されました。

教員の勤務時間ですか。週26時間が授業で、300分（5時間）は授業計画を立てるための時間。授業の準備は家でしてもいいことになっています。生徒についての心配ですか——テレビゲームが流行していて、そればかりしている子が多いのです。親たちがもう少し関心をもってしつけてくれればいいのですが」

「自分たちの子どもの頃と比べて、今の子どもの変った点ですか？そうですね、安全感というか、安心感がなくなってきていると

いうことでしょうか。家庭の問題もあるし。教師に甘えて接触してくる感じがします。そのせいか集中力が無い。家庭の問題ですか。物価が高いので、共働きしないとやっていけない。親たちは疲れて会話が無いのです。父親も母親も、皆フルタイムだからきついです。スウェーデンではフルタイムもパートタイムも保険その他が同じように保証されているので、経営者側は高くつくからパートタイマーを歓迎しない。皆フルタイムでやとってしまう」「家庭がこわれてしまっているのです。親が働くのは子どものためではなく、自分たちの経済生活のために働く。クラス25人中実父母がいるのは1人だけなんていう話も聞きました」「遊びですか。テレビを見たりテレビゲームのしすぎで困ったものです。ムレ

て遊ぶことは昔もなかったけれど、今は一層そうで、1対1で遊ぶんですね。子どもたちは」「昔と違って、いい学校、いい成績、いい職業へのニーズがなくなってしまったのです。人生はクオリティの問題という考え方が一般化してきて、その人にとって何がしたいかが大切にされます。昔は貧しかったので努力が必要でした。でもみたまされた時代では、価値観が変わってきました。大学は経済レベル、能力に関係なく、行きたければ行ける。医学部などごく一部の学部だけです、競争があるのは。大学は入るのはやさしいですが、出るのはむずかしいですね。半分くらいしか卒業できない大学はザラですね」「いい仕事、悪い仕事の区別がない。経済的に差がないので、かえってストレスが多いかもしれないですね」

●ハルビン)))

中国と聞けば、最近では何とんでも「一人っ子政策」が思い浮かぶだろう。少子化問題には世界中が関心を寄せているが、とくに少子化政策を徹底させていることで知られ、日本では最近、莫邦富氏による「独生子女」という本も出版され、またNHKテレビもこのテーマを取り上げた。国立大学には最近中国人留学生が急激に増加し、それらの人びとから一人っ子問題とそれにまつわるエピソードなどを聞く機会も多くなった。

同書によると、1949年に5億4千万人の人口が1990年に11億3千万人に達し、このままでは近い将来、12億を超える過剰人口をかかえ、生活の安定がおぼつかなくなる。

そうした心配から、1979年から一人っ子政策が実施され、1989年にすでに一人っ子政策の実施によって2億人の人口増加が抑制されたといわれる。

中国では、伝統的に「多子多福」の考え方が強く、それに「望子成竜」の心情の下で、子室的な感覚が多かったといわれる。

ところが、漢民族を中心に、急激な形で、一人っ子政策をとったので、「黒孩子（闇っ子）」といわれる2人目、3人目の戸籍のない子がとくに農村に増加したといわれる。

すでにふれたように、今回の調査ではペキンの調査を予定していた。しかし、天安門事件の後遺症などもあって、思うように話が進まず、ペキンを断念。東京学芸大学大学院生の李力さんと母親で黒竜江省の人民代表会議の代表王力さんのご尽力のおかげで、ハルビンとシンヨウに調査を行うことになった。

ここで調査地、ハルビンのロケーションを少し述べておこう。ペキンをご承知のように成田から4時間半（時差は1時間）、そしてハルビンは、ペキンからさらに飛行機で1時間半北に飛んだ位置にある。電車を使えば特快でも18時間とか。昔は国境の町で中央政府の威光より、むしろ旧ソビエトのほうに交流が盛んな都市だったという。今も町中にはロシア風の町並みが残る美しくエキゾチックな町である。町の中を有名な松花江が流れてお

り、人びとは休日や朝夕ここに集まってくる。空港からの広い道路の両側には、ポプラや柳が植えられ、北海道を思わせるすがすがしさだ。しかし、冬の平均気温はマイナス19度、夜間にはマイナス30度にも達するというのだから、想像を絶するものがある。ちなみに調査が行われたのは、ハルビンの重点小学校（ランクの高い学校）の1つであった。

もう一つの調査地瀋陽（シンヨウ）は、ハルビンから空路30分。昔は「奉天（ホウテン）」と呼ばれていたと聞けば、年輩の人には思い起こされるだろう。遼寧省の省都であり、古くから東北地方の経済的政治的中心地であった。ここでも重点小学校が調査対象校となった。中国では重点小学校以外の小学校は、今なお外部には開放しておらず、その様子を知ることはむずかしい。

中国についての取材をするために、ペキンからハルビンに飛んだ。通訳として迎えに来てくれたA氏に一人っ子政策のことをたずねてみた。A氏は漢民族でなく少数民族出身なので、子どもは2人まで出産が許されるが、漢民族でも上の子の心身の発達が思わしくないとか農村部で労力を必要としている場合にはとくに2人目の子が認められるという。

ペキンで、われわれについてくれた通訳のBさんは漢民族の出身で、一人っ子問題を話してくれた。毎年子どもを生む人数が会社に通知される。その数値を見て、それぞれの条件を考慮して、出産していい人を決める、文字通りの「計画出産」なのだ。

さらにいえば、結婚に際しても、会社に結婚願いを出し、それが許可されないと結婚できないという。なにしろ、私企業が増加したといっても、社会主義社会の公営企業が多いから、基本的に転職ができない。というより、ペキンに住むのにもしっかりとした職場がないと身元保証が得られず、住居を所有できなくなる。そのため、会社の決定に逆らうことなど到底できないという。

Bさんも婚約者がいるが、なかなか許可がおりず、3年間待ち続けている。そして今秋、許可がおりそうで、そうなると会社の手配してくれた広い団地に住める。しかし、自分としては、子どもを持つつもりはない。子どもよりも、自分のやりたいことをやり、自分の生活を大事にしたいという。

ハルビンはこの数年来、生活水準が上がったとかで、正直なところ、マニラやその他のアジアの都市よりは生活もゆとりが見える。治安もよく、それなりに暮らしやすそうな町だったが、ペキンはハルビン以上に活気がある印象だった。

日曜日など、王府井などの通りや天壇公園などへ行くと、一人っ子を目の中に入れても痛くないという感じで連れ歩いている親たちに出会う。なにしろ、収入が平均して200~300元というのに、190元前後のファミコンや300元のカメラなどが飛ぶように売れているとも聞く。

そうした姿を見ていると、出発前に日本の本で読んだ親に祖父母を加え「四二一綜合症」、あるいは一人っ子をかわいがりすぎる「小皇帝」「小太陽」とかの言葉が浮かんでくる。

しかし、ふだん親たちは働いており、幼児のうちから日托（デイ・ケア）よりも長托（日曜を除いて毎日、保育所で寝る）の形で、親もとを離れている子も多い。それだけに、日曜日は親子がふれ合える唯一の日のようであった。それに、生活のレベルも決して高くはなく、日本の昭和30年代前半という感じなので、ぜいたくといってもおのずと限度がある。

したがって、小皇帝といっても、日本で考えるほど、ぜいたく潰けになっていないように思えた。

それと同時に、中国は新生の社会特有の緊張感があって、町は活気にあふれていた。それだけに、多くの問題はあるにしても、一人っ子政策のもとで、子どもたちもそれなりに健全に成長していくように思えた。

●サクラメント)))

サクラメントは、カリフォルニア州の首都として知られる。アメリカ全体の経済の中心がニューヨークで、政治の中心がワシントンDC。あるいはワシントン州の経済の中心がシアトルで、オリンピアが州都のように、アメリカの州都はこじんまりとした静かなたたずまいをしている都市が多い。

ロスから飛行機で小1時間のサクラメントは、州都のイメージ通りの静かな町だ。ゴールドラッシュ時代の名残りをとどめるダウントウンを歩くと、1世紀ほど前の時代がよみがえってくるが、町そのものは清潔で、治安もよく、古き良き時代のアメリカにいる思いがする。

サクラメントの学校を訪ねたが、当然のことながら、学校としても安定していた。

実をいうと、サクラメントへ行く前に、ロスの下町にある学校を見学した。中南米からの密入国者の多い地域とかで、94%の家庭が生活保護を受けている状況だった。もちろん、大多数の人たちはスペイン語しか話せない。

したがって、この学校ではスペイン語を第一言語とし、国語や社会科、音楽、家庭科などはスペイン語で授業をしていた。そのため、この地区の教師になるにはスペイン語を使えるのが条件となる。そして、英語は、アメリカ社会で生活していくのに不可欠なので、とりあえず算数と理科を通して教えていく。社会科や音楽などの情緒的な内容は、母国語で教えるのが望ましい。それに対し、算数のような非情緒的な内容は英語で教え、どの子にも通用する共通語として英語を考える、ESL (English as Second Language) の思想である。

校長の話では、この学校は子どもを4つのグループに分け、つねに3つのグループが学校へ通う。これは密入国をする子どもの数が

多すぎて、教室が間に合わないことも原因だが、それと同時に、地域が荒廃し、子どもたちが安心して地域で生活できない。したがって学校は子どもが来たいときはいつでも登校できるように、門を開けておく。夏休みもなく、365日開いている学校で、校長は自分の学校の特色を「通年制学校」(Year Around School)と語っていた。

すぐ隣の学校を訪ねてみた。この校区も密入国者が多く、大半の子がスペイン語しか話せない。そこで校長は、どの子にも喜んで学校に来てもらえるように、音楽や図工を大事にしたいという。残念ながら、国語や算数を教えたくとも、子どもたちの学力がそれについていけない。そこで、やむなく、母国の歌を歌い、絵をかかせ、そして、活気にあふれた学校生活を送らせたいという。そしてこの学校を校長は、一口に自分の学校の特徴をいうなら、「人間学校」(Human School)と語っていた。

ロスは今春、白人警官の無罪をめぐって暴動が発生したが、実際に市内のあちこちを歩いてみると、人種のるつぼという実感がわいてくる。

実をいうと、90年度の調査でロスを調査地としたが、実際にアンケートを配布できたのは、白人が多く住み、治安の安定したロス郊外のトーラスだった。先ほどのロス市内の学校では調査できそうもないが、できたとしてもスペイン語の調査票が必要となる。そして今回のサクラメントも、すでにふれた通り、地域的に安定したミドルクラスの住む地域だった。

また、88年度のシアトル調査はシアトル市郊外のタコマ市とオリンピア市で行われた。ここも地域的に安定しているところだ。そうした意味では、われわれのアメリカ調査は、

いわゆるよきアメリカを象徴するような地域を対象としたものだったように思う。そのため、サクラメントのデータなどはアメリカ全体と比べると、意欲的な子どもの意見をより多く反映しているといえよう。

もっとも、先ほどのロスの事例のように、むずかしい問題をかかえる地域では調査そのものがむずかしいのに加え、すでにふれたようにスペイン語や韓国語、中国語などでの調査票を求められるので、そうした意味での対応はむずかしかった。

実をいうと、サクラメントに先だって、ニューヨークでの調査を計画してみた。しかしウォール街近くの校区では調査可能だが、ハーレムのあたりだと調査はむずかしい。と、ウォール街のデータでニューヨークを代表させるのは無理というのが、市の教育関係者の意見で、そのアドバイスにしたがって、ニューヨークでの調査を断念した。

アメリカの町だと、通りを1本越すだけで住む人も町の雰囲気も変わって町並みが一変することが少なくない。それだけ地域差が大きく、平均という考え方が成り立ちにくいのがアメリカのように思える。

比較的受け入れ体制のよい地域を選んで調査をしたが、それでも異国のことゆえ、調査は難航した。そうした苦労は、舞台裏の話としても、いずれにせよ、ミドルクラス以上の地域で行われたのが、今回のサクラメント調

査だった。

なお、今回の調査もこれまでと同様、小学校5年生を対象に行われ、表1に掲げた4地域、合計3,446名の子どもたちから調査票が回収された。今回新たにスウェーデン語版、北京語版の調査票が作成されたが、その作成にあたっては、東海大学の北欧文学科教授山下泰文氏、東京学芸大学大学院生・武素元、李力の各氏と、現地の研究者、小学校教員の方々の多大な協力を得た。また英語版も、内容について多少サクラメント側の要請や意見を入れたものに修正してある。

なお、ストックホルムのサンプルは、厳密には近郊のマルメとカールスルーナのデータであるが、なじみがない都市名なのでストックホルムと呼称することにした。調査時期は表3に掲げた通り、1992年3月から6月にかけてであった。なお本レポートの中では、必要に応じて第1回、第2回調査のソウル、タイペイ、バンコク、オークランド（ニュージーランド＝以下同）のデータをあわせて見ていくことにする。表2にそのサンプル構成を掲げたが、くわしくはモノグラフ・小学生ナウvol.8-10「国際比較調査・7つの都市の子どもたち（ソウル、タイペイのデータを所収）」1989年1月発刊、同じくvol.10-9「都市環境の中の子どもたち（バンコク、オークランドのデータを所収）」1990年12月発刊、を参照されたい。

表1 サンプル構成（第3回国際比較調査）

地 域 名	サンプル構成	(人)		
		合 計	男 子	女 子
東 京	東京・札幌・仙台・名古屋	1,758	904	854
ハルビン	ハルビン・シンヨウ	522	258	264
サクラメント	サクラメント	542	267	275
ストックホルム	マルメ・カールスルーナ	624	312	312

表2 サンプル構成（第1・2回国際比較調査）

(人)

	地域名	サンプル構成	合計
第1回	東京	東京・仙台・岡山	3,057
	シアトル	シアトル・ヒューストン	951
	ソウル	ソウル	1,445
	タイペイ	タイペイ	694
第2回	東京	東京・札幌・福岡	1,282
	ロス	トーランス・ガーディナ	376
	オークランド*	オークランド・ウェリントン	1,046
	バンコク	バンコク・ロブリー	864

*オークランド（ニュージーランド）＝以下同

表3 調査時期

	地域名	実施時期
第1回	東京	1988年6月～7月
	シアトル	1988年5月
	ソウル	1988年6月
	タイペイ	1987年12月
第2回	東京	1989年10月～12月
	ロス	1990年2月～4月
	オークランド	1989年12月～3月
	バンコク	1990年3月～4月
第3回	東京	1992年5月～6月
	サクラメント	1992年5月～6月
	ハルビン	1992年3月
	ストックホルム	1992年5月～6月

2. 家族と生活圏をめぐって



いうまでもなく子どもの生活基盤は家庭と地域にある。かつては時代の変化の外にあって、比較的安定した集団であった家族も、最近では社会変動の波にはほんろうされ、安定性

を失いつつあるとされる。いったい4地域の子どもたちはどんな家族の中で暮らしているのだろうか。

●家族のかたち)))

まず表4は子どもの数である。一人っ子政策が徹底しているハルビンでは3人以上の兄弟数はさすがにゼロ。9%いる2人兄弟は少数民族の家庭だろう。その他の地域で3人かそれ以上の子どもがいる家は東京が35%と最低で、ストックホルム45%、サクラメントが47%である。

これと関連して表5は家族サイズ、表6は祖父母との同居をみたものだ。東京は4人に1人、ハルビンでは5人に1人が祖父母と住

んでいるが、サクラメント、ストックホルムでは1割を切っている。ストックホルムの予備調査のときに校長が「ここでは祖父母と同居する習慣はありませんから、この質問は無意味ですが……移民の家庭でまれに同居している場合があります」と言われたのを思い出した。とすれば3%という数値は移民の子のものであろう。いずれにせよ4地域とも家族サイズは4人か3人が一般的で、どこでも家族は小型化していることが実感である。

表7は第1回、第2回の結果をあわせて作表したものだ。

なお、表8によれば、就寝形態は欧米が1人で、アジアは「兄弟と一緒に」寝るのが典型性をもっている。ストックホルムは兄弟数が比較的多いのに1人で寝ることが徹底して

おり89%。また小学5年生とはいえ「親と一緒にの部屋で」はバンコク(34%)、ハルビン(34%)、ソウル(32%)、東京(23%)の順に30~20%に達している。これは家の狭さと共に、十分分離していない親子関係の所在をも示すものだろう(図1)。

表4 子どもの数

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
1 人	9.9	91.2	10.2	2.3
2 人	55.0	8.8	42.4	52.4
3人以上	35.1	0.0	47.4	45.3

(%)

○ = 最大値 (以下同)

表5 家族の人数

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
2 人	1.8	0.0	16.3	5.2
3 人	9.1	80.3	35.6	14.5
4 人	44.8	14.5	22.2	48.5
5人以上	44.3	5.2	25.9	31.8

(%)

表6 祖父母との同居率

	(%)
東 京	24.3
ハルビン	18.6
サクラメント	8.4
ストックホルム	3.1

表7 子どもの数と家族

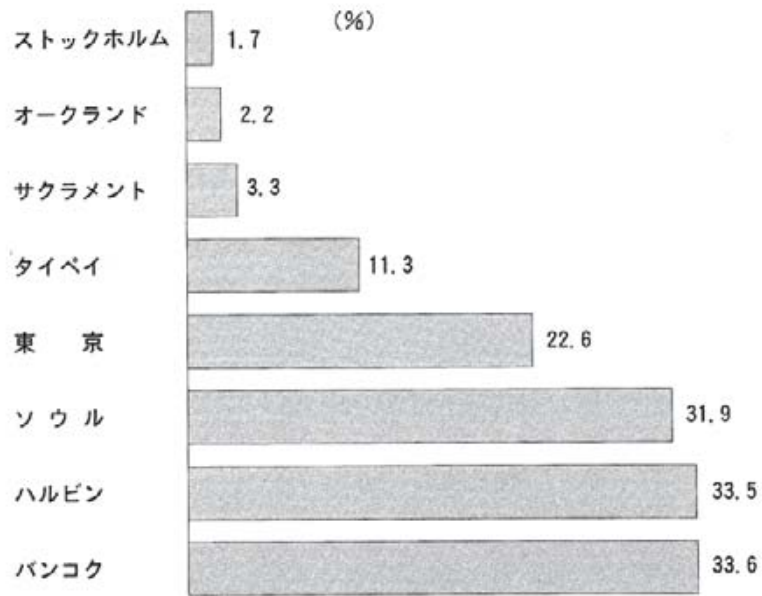
	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム	オークランド	バンコク	ソウル	タイペイ
子どもの数	2.2人	1.1人	3.2人	2.4人	3.2人	2.9人	1.9人	3.0人
家族サイズ	4.5人	3.5人	3.7人	4.0人	4.6人	5.3人	4.8人	5.3人
祖父母との同居率	24.3%	18.6%	8.4%	3.1%	9.4%	26.5%	23.1%	29.6%

○ = 最大値
 ○ = 最小値
 (以下同)

表8 誰と寝ているか

	1人で	兄弟と	親と	その他
ストックホルム	89.1	7.9	1.7	1.3
サクラメント	65.3	29.4	3.3	2.0
オークランド	60.7	31.8	2.2	5.3
ハルビン	60.0	4.4	33.5	2.1
タイペイ	36.2	47.7	11.3	4.8
東 京	32.3	37.8	22.6	7.3
バンコク	24.3	39.0	33.6	3.1
ソウル	22.9	41.7	31.9	3.5

図1 親と同室で寝ている子



●学校まで)))

子どもたちの生活圏を示すデータの1つとして、家から学校までの通学手段を見てみよう(表9)。東京の子どもには、歩いていける場所に学校が配置されている。しかしハルビンでは自転車34%。テレビ中継の朝に自転車で通勤する人びとの大群の映像が思い起こされる。

サクラメントはやたらに広い大都会であり、車で送ってもらう子が徒歩で通学する子の2

倍。バス通学者も25%。ストックホルムは徒歩か自転車だ。

なお、学校までの所要時間の平均は表に掲げたように、遠くてもハルビンの16分、近いところではストックホルムの6分。いずれの通学方法にせよ、どこの都市も子どもに負担でない距離に学校が配置されていることがわかる。

表9 登校方法と所要時間

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
徒 歩	99.7%	66.3%	21.1%	49.1%
自 転 車	} 0.3	33.7	12.6	37.2
バ ス		0.0	25.0	7.1
自 動 車		0.0	41.3	6.6
所要時間	10.3分	15.8分	6.7分	5.5分

3. 生活リズムを追って



●起床から登校まで)))

次に、一日の生活リズムを追ってみよう。
まず表10によれば、起床が一番早いのはハル

ビンの子で6時前に34%、6時半までにほぼ
全員が起床し、平均起床時刻は6時12分であ

表10 朝の生活時間

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
起床時刻	6時54分	6時12分	6時45分	6時49分
朝食時刻	7時23分	6時48分	7時32分	7時14分
登校時刻	7時51分	7時18分	8時12分	7時46分
朝の持ち時間	57分	1時間6分	1時間27分	57分

る。それに対し、他の地域はもっと寝坊で、起床時刻も幅が広い。朝食の時刻も同様で、ハルビンの子は7時前にほぼ全員が食事して、

7時半前に全員が登校してしまう。起床してから登校するまでの時間は、1時間から1時間半と、どこの都市もあわただしい。

●朝食の風景)))

次に子どもたちの昨日の朝食の様子を見よう。表11に示したように、まず朝食抜きの子(欠食率)はサクラメントが13%と群を抜いて高く、しかも学校給食を朝から利用している子が5%もある。通学の途中で歩きながらの子も3%と、サクラメントの子どもたちの朝食の数字からは、たぶんに離婚など、不安定な家庭の姿を暗示するものが見える。

表12には第1回、2回の調査データも加えて作表したが、孤食率(子ども1人の朝食)は東京が群を抜いて低く19%でしかない。サクラメントでは33%と約3人に1人が一人ぼっちの朝食だが、東京は約5人に1人である。しかし日本の感覚からは、5人に1人という数字でも多すぎるとも感じられる。

表11 朝食の場所 —昨日—

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
自分の家	97.7	98.2	79.6	94.2
通学しながら	0.2	0.0	2.6	0.2
店で	0.5	0.0	0.6	0.0
学校で	0.2	0.6	4.6	0.3
食べない(欠食)	1.4	1.2	12.6	5.3

表12 朝食の様子

(%)

	欠食率	孤食率	自分の家で 食べた割合	給食 その他
サクラメント	12.6	32.9	79.6	7.8
東京	1.4	18.6	97.7	0.9
ハルビン	1.2	24.5	98.2	0.6
ストックホルム	5.3	34.3	94.2	0.5
オークランド	8.0	38.6	89.5	2.5
バンコク	3.5	36.8	84.2	12.3
タイペイ	1.7	18.2	84.6	13.7
ソウル	5.1	15.0	93.9	1.0

●夕食から就寝まで)))

子どもたちが夕食をとる時刻は表13に示した。早起き型のハルビンの子は6時半までにほとんどが夕食をとる。ストックホルムの子は6時までに全員に近い子が夕食をとっている。日照時間の短い国の生活リズムであろう。東京の子は一番遅く、7時以降が34%。塾通いのせいもありそうだ。

就寝時刻は、早いのがハルビンで8時17分。このデータを見ていると、早寝早起きがやたらに奨励された日本の昔の子どもたちの生活時間をほうふつとさせられる。遅いのはやはり東京で9時40分。ストックホルムは夕食が5時43分と早いのに、寝るのは遅く9時27分で夜の時間を多く持っている(表14)。

なお、表に睡眠時間を計算して掲げてある。

4つの地域とも差は少ないが、一番よく寝ているのはハルビンで9時間55分とほぼ10時間に近い。一番短いのは日本で9時間14分。下部に第1回、2回調査の数値を掲げた。

次に、表15に夕食のテーブルにいた人びとを掲げた。朝に比べると孤食率は低い。家族全員で食事をとるのはサクラメントが最も多く77%、ハルビン75%、ストックホルム65%、日本が一番低くて41%でしかない。逆に「父親だけ不在」の食卓は39%と日本が最大だ。働きすぎ日本と指摘される父親の姿が浮かび上がっている。

そして、こうした傾向はこれまでの調査地を含めて考察した表16からも明らかで、東京の子どもたちは孤食する割合は少ないが、父親たちの不在率が高い。

表13 夜の生活時間

		(%)			
		東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
夕食時刻	6時以前	11.4	47.7	35.0	88.9
	6時1分～6時30分	32.7	36.1	20.5	2.9
	6時31分～7時	22.0	10.6	19.7	5.5
	7時1分以降	34.2	5.6	24.8	2.7
就寝時刻	8時30分以前	4.2	56.6	13.9	3.7
	8時31分～9時	8.0	30.2	31.9	28.0
	9時1分～9時30分	21.1	11.3	20.4	21.3
	9時31分以降	67.3	1.9	33.8	47.0

表14 夜の生活時間（平均）

	就寝時刻	睡眠時間
東 京	9時40分	9時間14分
ハルビン	8時17分	9時間55分
サクラメント	9時8分	9時間37分
ストックホルム	9時27分	9時間22分
オークランド	8時31分	10時間20分
バンコク	8時30分	9時間28分
タイペイ	9時48分	8時間37分
ソウル	10時16分*	8時間44分

*サマータイムのため

表15 夕食の様子

(%)

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
1人だけで	4.6	3.3	4.6	10.5
家族全員	40.7	75.4	77.4	64.7
父親のみ不在	39.3	16.6	8.5	13.4
その他	15.4	4.7	9.5	11.4

表16 夕食の様子（まとめ）

(%)

	孤食率	全員で	父親のみ不在
東 京	4.6	40.7	39.3
ハルビン	3.3	75.4	16.6
サクラメント	4.6	77.4	8.5
ストックホルム	10.5	64.7	13.4
オークランド	8.2	65.9	12.6
バンコク	7.1	67.4	17.8
ソ ウ ル	5.0	55.2	29.4
タイペイ	1.7	73.5	16.6

○ = 最大値と2位

●空腹感をめぐって)))

子どもが健康で子どもらしい生活時間と生活リズムの中で暮らしていれば、子どもはおなかをすかせるものである。生活時間や食事の質の問題以外に、よく遊び生き生きと暮らしているかどうか、生活の健康度のバロメーターでもあろう。

こうした観点から朝食の席に座ったときと、学校から帰ってきたときの空腹感をたずねた結果が表17である。朝食時の「いつも空腹」

の数値に注目して空腹の順位を定めれば、サクラメント(26%)>ストックホルム(17%)>東京(12%)>ハルビン(4%)の順となり、第1回、2回の調査データを加えれば表の順序となる。

なぜかアジアの国々の子どもが空腹でないと答え、欧米の子どもが空腹度が高い。学校から帰ったときも、ほぼ同様の傾向がみられる。なぜだろうか。

表17 空腹感

	朝 食 時			帰 宅 時		
	いつも すいている	わりと すいている	小 計	いつも すいている	わりと すいている	小 計
ハルビン	4.0	30.5	34.5	13.8	32.8	46.6
バンコク	5.0	31.4	36.4	21.1	40.2	61.3
ソウル	6.7	22.9	29.6	11.7	33.9	45.6
東京	11.9	41.0	52.9	23.6	38.8	62.4
タイペイ	12.5	16.7	29.2	32.9	24.0	56.9
ストックホルム	16.9	44.6	61.5	26.5	52.8	79.3
サクラメント	26.3	49.3	75.6	43.8	40.9	84.7
オークランド	27.3	41.6	68.9	48.0	37.9	85.9

4. 子どもの放課後



●昨日、友だちと遊んだか)))

それぞれの地域で子どもたちは放課後家に帰ってから、どんな生活をしているのだろうか。

まず図2は、子どもが昨日、下校後に友だちと遊んだかどうかをみている。最も友だちと遊ばなかったのはハルビンの子で86%、次がストックホルムの68%、東京の62%、サクラメントの49%となっている。全体として都市の子どもたちの放課後は、友だちと遊ばず、いわば1人遊び型になってきている様子がわかる。念のため、友だちと遊んだ子についてだけ、遊んだ人数をたずねてみると、図3のようになる。ストックホルムではもともと友

だちと遊んでいないが、遊んだ子でもきわめて少数の友だちとしか遊んでいない。ムレて外で遊ぶのは、北欧の子ども文化の中になくスタイルなのだろうか。それとも校長が心配していたように、テレビゲームのせいなのか。

なお「昨日」に調査対象日を限定してあるが、天候はストックホルムが30%雨だった以外は、十分外遊びに適した状態（晴れ・くもり）であった。子どもが友だちと外遊びをしなくなったのは、今や日本だけでなく、世界的傾向なのかもしれない。

図2 昨日、下校後に友だちと遊んだか
—遊ばなかった子の%—

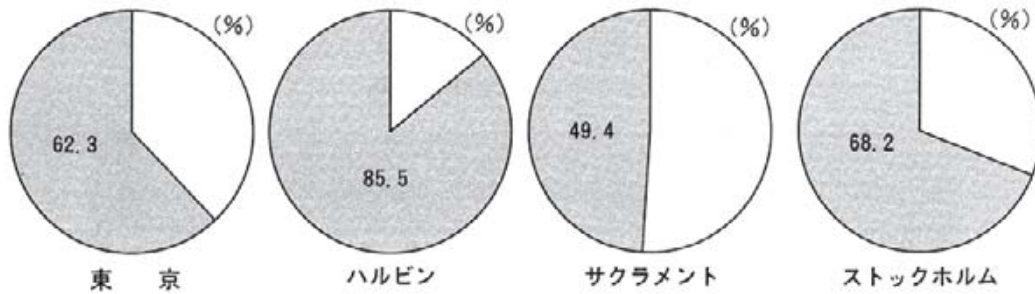
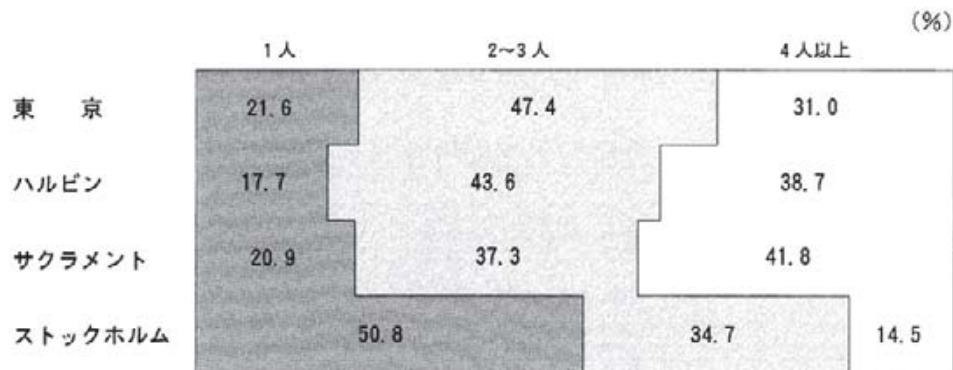


図3 何人と遊んだか（自分以外に）



●テレビ視聴)))

では調査対象日に家の中で子どもたちは何をしていたか。表18によれば、まずテレビの所有台数はハルビン以外は複数の地域が一般的で、とくにサクラメントでは3台が30%、4台18%、5台以上ある家も13%ある。東京はサクラメントより少ないが、ストックホルムよりは多い。

では、どのくらいテレビを見ているか。同じように「昨日」に限定して「見たかどうか」をたずねた結果が図4である。ハルビンの子は61%と少ないが、他の地域は非常によく見ている。サクラメントよりストックホルムの子のほうがよく見ているのは、われわれの中にある一般的なイメージと違う気もする。

またハルビンの子は図2で見たように外で友だちと遊んでいないのに、テレビもあまり見ていない。一人っ子たちは一体何をしているのだろうか。勉強だろうか。

このことは表19の視聴時間にも表れている。ハルビンの子の視聴時間はわずか22分と少ない。東京が1時間38分、サクラメントとストックホルムでは2時間を超えている。

さて対象を昨日からはずして、一般的に視聴の様子をたずねてみよう。表20によれば、「毎日見る」子は、ストックホルム85%、サクラメント72%、東京67%、そしてハルビンは大きく減ってわずか25%である。この数値は先に見てきた「昨日」の視聴の様子とも同

じ傾向を示している。「ほとんど見ない」子はハルビンで20%いるだけで、他の地域は限

りなくゼロに近い。表21は全体のまとめである。

表18 テレビの所有台数

	(%)			
	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
1台	15.7	67.7	12.6	12.2
2台	41.5	29.4	26.2	48.1
3台	22.8	1.5	29.8	26.9
4台	12.4	1.0	18.4	8.8
5台以上	7.6	0.4	13.0	4.0

図4 昨日テレビを見た子

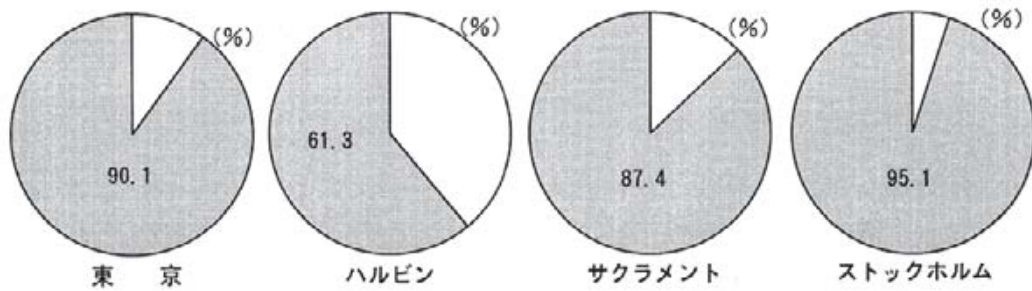


表19 昨日のテレビ視聴時間

	平均時間	(見た者について)	
		1時間以下	4時間以上
東 京	1時間38分	41.1%	11.0%
ハルビン	22分	66.8	1.2
サクラメント	2時間14分	19.7	20.2
ストックホルム	2時間23分	24.6	9.4
オークランド	2時間42分	30.1	22.0
バンコク	2時間25分	24.7	12.7
ソ ウ ル	1時間41分	—	—
タイペイ	1時間44分	—	—

○ = 最大値と2位

付表 昨日のテレビ視聴時間30分以下

(%)

東 京	33.3
ハルビン	48.4
サクラメント	9.6
ストックホルム	13.1

表20 テレビの視聴（週当たり）

(%)

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
毎日見る	67.3	25.1	72.2	84.7
だいたい見る	22.3	26.9	10.1	9.6
半分くらい見る	6.3	19.2	8.3	4.3
見ない日のほうが多い	3.2	8.4	2.6	0.6
ほとんど見ない	0.9	20.4	6.8	0.8

表21 テレビの所有台数と視聴時間（まとめ）

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
1台	15.7%	67.7%	12.6%	12.2%
2台	41.5	29.4	26.2	48.1
3台以上	42.8	2.9	61.2	39.7
視聴時間	1時間38分	22分	2時間14分	2時間23分
毎日見る割合	67.3%	25.1%	72.2%	84.7%
昨日テレビを見た子	90.1%	61.3%	87.4%	95.1%

●お手伝い))

勉強時間は後で見ることにして、放課後の時間に入ってくるものは「手伝い」であろう。

表22に掲げた6種類の手伝いについてたずね、「毎日する」割合をこれまでのデータと共に掲げてある。各地域の値で多いほうから2つに○を、最小値1つに—をつけてみた。

○の数でいえばバンコクの子がよく手伝っているが、その他の地域も1つか2つかには○がついており、無印で最小値が集

中しているのは東京とストックホルムである。しかし、全体として「毎日手伝う」子の割合はどの地域でも少ない。都市化の中でどこでも生活が便利になり、子どもの労働力をさほど必要としなくなっているのだろう。手伝いの持っていた教育力は、どの地域でも大きく失われつつあるのだろう。なお、性差については後にまとめて見ていくことにする。

表22 家事の手伝い（毎日する割合）

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム	オークランド	バンコク	ソウル	タイペイ
洗濯	1.7	3.5	○6.5	1.0	4.4	○9.7	3.2	2.1
夕食の買い物	2.4	6.4	7.1	2.4	7.3	8.5	○10.2	○8.9
庭や玄関の掃除	2.7	○6.0	3.6	1.3	3.2	○11.3	—	—
部屋の掃除	4.3	17.8	19.3	4.5	19.3	○22.0	○30.3	11.0
皿洗い	5.0	18.6	13.4	4.3	○31.0	○28.1	7.5	5.8
夕食の手伝い	6.4	4.5	○15.8	2.7	○13.7	7.6	6.6	7.6

— = 質問項目なし（以下同）

5. 一日の楽しさ



こうした一日の生活リズムの中で、子どもたちはどんなときを楽しいと思い、どんなときをつまらないと感じているのだろうか。

表23、表24は、一日の時間帯を15か所として、それぞれの時間がどのくらい楽しいかを子どもにたずねた結果である。

まず表23は「とても楽しい」と答えた%の大小順に作表したものだ。「昼休みや放課後の友だちとの遊び、体育の時間」が数値は異なっても、どの地域でも上位に来ている。次いで「家でテレビを見る、給食の時間」なども子どもにとって楽しい点で共通している。

逆に楽しくないのは、「宿題をしているとき、朝目がさめたとき、朝食時、授業の前、算数の時間」などで、子ども心はどの地域にも共通のものがあるようだ。

そして、表24はこの結果を地域間で比較したものである。一番「楽しい」とする反応が多いのはハルビンで、15項目のうち7項目が

4地域の中で最大値をとっている。次はサクラメントの子で6項目、東京はわずか1項目（放課後友だちと遊ぶとき）、ストックホルムも1項目（朝目がさめたとき）である。

そして%の数値の平均からも、順位の平均からも、ストックホルムの子は4地域の中で一番楽しさの少ない子どもたちのようである。本当に楽しいと感じない生活なのか。それともとりたてて「不幸」がないと、社会全体が「楽しさ」を強く感じなくなるのだろうか。すべての国の理想である社会福祉の行き届いた状態であることと、何か関連があるのかどうか、気がかりである。

なお後に勉強の章でふれるが、ハルビンの子だけが、他の3地域で下位に来ている「算数の時間」「宿題をしているとき」が比較的上位に来ていることを、気に止めていただきたい（図5）。

表23 一日の楽しさ

	東京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
70%		昼休み (71.3)		
60%	放課後友だちと遊ぶとき (67.7) 昼休み (65.8)	体育の時間 (66.1)		
50%	体育の時間 (54.3)		昼休み (59.5) 夜ねむっているとき (55.3) 放課後友だちと遊ぶとき (54.8)	夜ねむっているとき (54.2) 放課後友だちと遊ぶとき (53.4)
40%	家でテレビを見るとき (44.5)	放課後友だちと遊ぶとき (48.7) 算数の時間 (44.1) 夕食後父母と話すとき (41.9) 家でマンガを読むとき (41.7) 家でテレビを見るとき (41.3)	家でテレビを見るとき (46.3) 体育の時間 (45.5)	体育の時間 (43.0)
30%	給食のとき (35.6) 家でマンガを読むとき (33.8)	給食のとき (34.6)	給食のとき (37.6) 夕食のとき (35.1)	昼休み (35.8) 家でテレビを見るとき (32.2)
20%	夜ねむっているとき (29.5) 夕食のとき (27.2) 夕食後父母と話すとき (26.2) 夜ふとんに入るとき (25.0)	宿題するとき (29.5) 夜ねむっているとき (28.5) 夜ふとんに入るとき (21.8) 授業の始まる前 (20.8)	夜ふとんに入るとき (26.0) 家でマンガを読むとき (24.9) 夕食後父母と話すとき (23.1)	家でマンガを読むとき (24.1) 夕食後父母と話すとき (20.6)
10%	授業の始まる前 (15.5) 算数の時間 (12.7)	夕食のとき (18.6)	朝食のとき (19.3) 算数の時間 (19.1) 授業の始まる前 (14.1) 宿題するとき (10.1)	夜ふとんに入るとき (18.8) 朝目がさめたとき (17.5) 給食のとき (17.3) 夕食のとき (15.3)
0%	朝食のとき (7.4) 朝目がさめたとき (6.2) 宿題するとき (3.3)	朝食のとき (7.1) 朝目がさめたとき (5.1)	朝目がさめたとき (8.5)	朝食のとき (8.7) 算数の時間 (8.7) 授業の始まる前 (5.7) 宿題するとき (1.9)

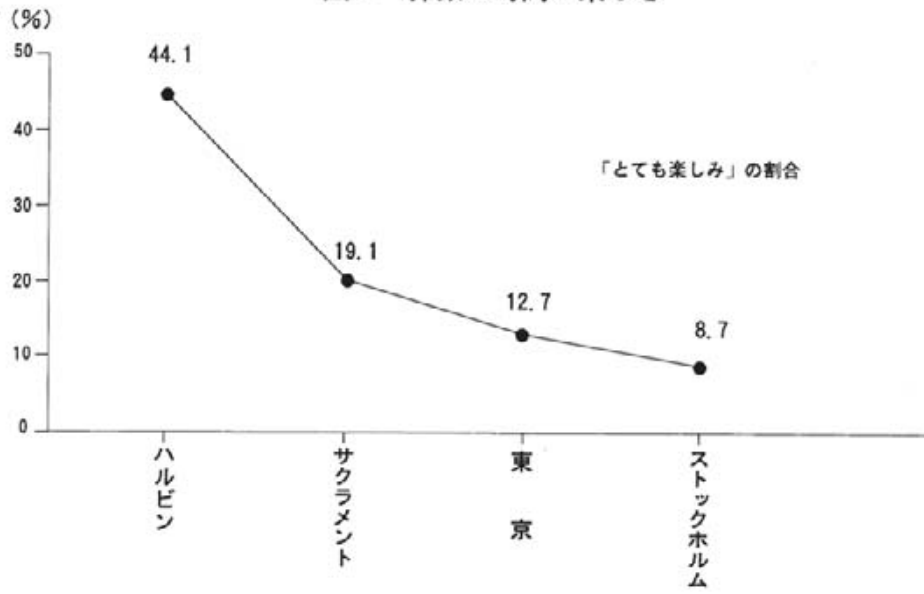
「とても楽しい」割合

表24 一日の楽しさ（順位）

（％）

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
授業の始まる前	② 15.5	① 20.8	③ 14.1	④ 5.7
算数の時間	③ 12.7	① 44.1	② 19.1	④ 8.7
体育の時間	② 54.3	① 66.1	③ 45.5	④ 43.0
昼休み	② 65.8	① 71.3	③ 59.5	④ 35.8
家でマンガを読むとき	② 33.8	① 41.7	③ 24.9	④ 24.1
夕食後父母と話すとき	② 26.2	① 41.9	③ 23.1	④ 20.6
宿題するとき	③ 3.3	① 29.5	② 10.1	④ 1.9
朝食のとき	③ 7.4	④ 7.1	① 19.3	② 8.7
夕食のとき	② 27.2	③ 18.6	① 35.1	④ 15.3
家でテレビを見るとき	② 44.5	③ 41.3	① 46.3	④ 32.2
夜ねむっているとき	③ 29.5	④ 28.5	① 55.3	② 54.2
給食のとき	② 35.6	③ 34.6	① 37.6	④ 17.3
夜ふとんに入るとき	② 25.0	③ 21.8	① 26.0	④ 18.8
放課後友だちと遊ぶとき	① 67.7	④ 48.7	② 54.8	③ 53.4
朝目がさめたとき	③ 6.2	④ 5.1	② 8.5	① 17.5
平均順位	2.3位	2.3位	1.9位	3.5位
平均％	30.3	34.7	31.9	23.8

図5 算数の時間の楽しさ



6. 親子関係



今回の調査地域に中国を加えたのは、一人っ子政策が子どもの成長にどんなメリット、デメリットをもたらすかに関心をもったためだった。メリットがあればそれでいいとして、もしデメリットがあれば、少子化時代を迎えたわが国でも、自分たちの問題として、それをカバーしていかなければならないだろう。

ここで場面を設定して「こんなとき、親はどのくらい心配してくれるか」「わがママを聞いてくれるか(願いをかなえてくれるか)」、また「両親の人柄」をたずねる項目を日本語

版と北京語版の調査項目に加えた。ストックホルムとサクラメントでは親について人柄をたずねる項目を入れることに同意が得られなかった。離婚が多く不安定な家庭の姿があり、また親子関係は容易に変えられない絶対的な関係であるだけに、そこへ踏み込むことを学校側が嫌うためである。いずれにせよ英語版、スウェーデン語版からは除外されているので、「両親評価」は東京とハルビンだけのデータとなっている。

●どのくらい心配してくれるか)))

まず表25、図6は4つの場面で、「親がどのくらい自分のことを心配してくれるか」たずねた結果である。「友だちとけんかをして

元気がないとき」「食欲がないとき」「帰りが遅いとき」「風邪で熱が出たとき」のいずれの項目をとってみても、ハルビンの親が

最も心配し、ストックホルムの親は最も心配していない（と子どもは感じている）。「とても心配してくれる割合」をとって作図した図6に明らかのように、いわゆる過保護な親の傾向は、おおむねハルビン>東京>サクラメント>ストックホルムの順となっている。

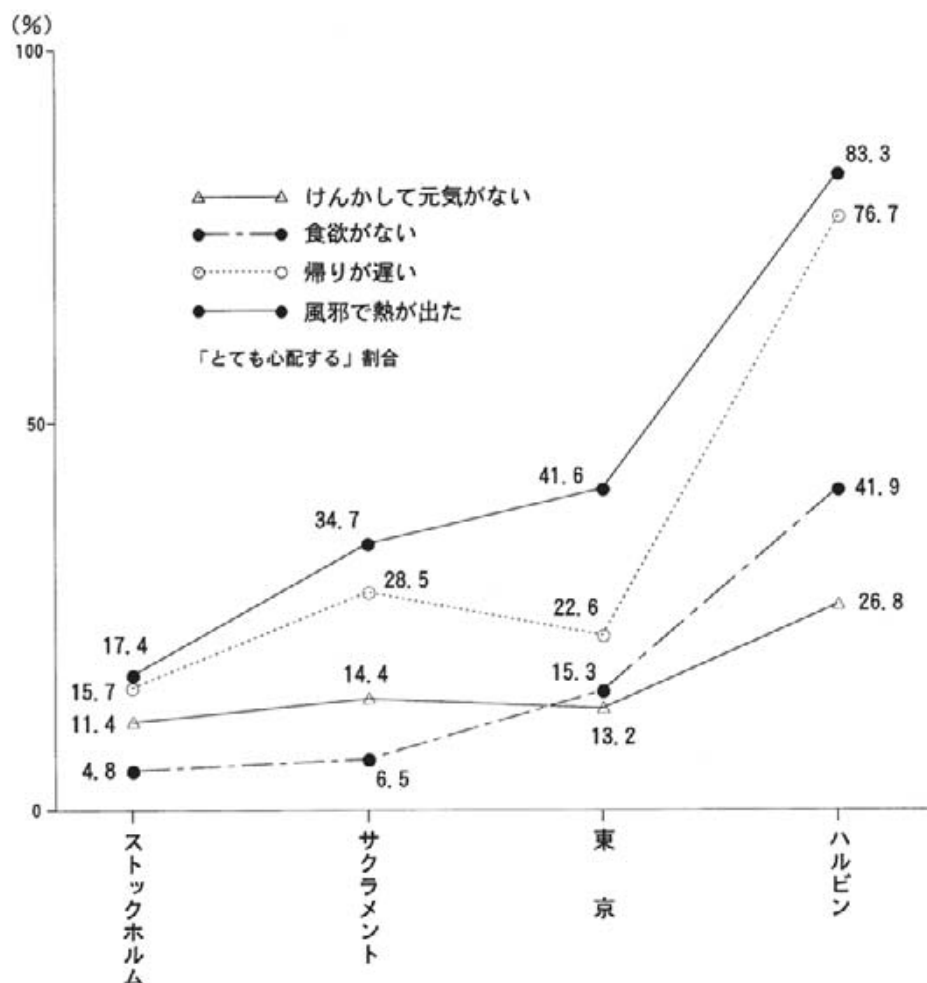
例えば、「風邪で熱が出たとき」ハルビンの親は83%がとても心配してくれ、東京はその半分の42%、ストックホルムではわずかに

17%でしかない。「食欲がないとき」では同じくハルビンの親は42%、東京が15%、ストックホルムではわずか5%でしかない。とにかくハルビンの親の心配ぶりは群を抜いていることがわかる。と同時にストックホルムの親の数値の低さも、日本人にとっては冷たすぎると感ずる。または早くから相互に自立した親子関係なのだろうか。

表25 親が心配するか

		(%)			
		東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
けんかをして 元気がない	心配 { ととても かなり	13.2	26.8	14.4	11.4
		25.7	34.3	21.3	24.3
	小 計	38.9	61.1	35.7	35.7
食欲がない	心配 { ととても かなり	15.3	41.9	6.5	4.8
		29.5	35.5	11.4	7.2
	小 計	44.8	77.4	17.9	12.0
帰りが遅い	心配 { ととても かなり	22.6	76.7	28.5	15.7
		35.1	12.7	21.7	23.9
	小 計	57.7	89.4	50.2	39.6
風邪で熱が出た	心配 { ととても かなり	41.6	83.3	34.7	17.4
		37.2	9.6	36.9	31.8
	小 計	78.8	92.9	71.6	49.2

図6 親が心配するか



●ゼイタクさせるか)))

昔から一人っ子は精神的にも物質的にも配慮されすぎて、過保護でひ弱に育つとされる。一人っ子ばかりの中国では「小皇帝・小太陽」という言葉も使われていると聞く。

表26は「友だちが持っているおもちゃや文房具をほしいと言ったら買ってくれるか」「夕食に食べたいものがあったら作ってくれるか」「誕生日にごちそうを作ってくれるか」「誕生日のプレゼントにいいものをくれるか」4つの場面を設定して、子どもの大事にされる方、物質的な甘やかしをたずねてみた結果だ。

「きっとしてくれる」の数値をひろってみると、どの場面でもハルビンの子が高い値を示し、ストックホルムの子は最も低い値を示している。「夕食に食べたいものがあったら作ってくれるか」を例にとると、「きっと作ってくれる」は、ハルビン(39%)>東京(31%)>サクラメント(21%)>ストックホルム(17%)となっている。また「友だちの持っているものを」きっと買ってくれる親は、ハルビン(13%)>東京(11%)>サクラメント(8%)>ストックホルム(6%)

と、やはりハルビンの子どもたちの過保護ぶりが目立つ。

図7は「きっとしてくれる」の数値を掲げたものだが、「誕生日のプレゼントにいいものを買ってくれる」だけはハルビンの値が最小になっている。これは中国ではお金やプレゼントを与えるのはお正月で、誕生日にプレゼントする習慣はまだ一般化していないせいだろう。

次に子どもが両親をどう評価しているか見てみよう。「あたたかい、やさしい」等のどちらかといえば母的特性と、「頭がいい、頼れる」の父的特性と、「尊敬できる」のような中性的特性を設定してみた。まず表27で両

地域を比較してみよう。「その通り」の強い同意を示す子は父親・母親とも全項目でハルビンの値が東京の子の値を大きく上回っており、図8がそれを示している。

またそれぞれの地域で父親評価と母親評価とを比較してみると、表28が示すようにハルビンでは5項目中4項目で大きく母親評価が高くなっている。残る「頭がいい」でも、父親67%、母親62%と差は極めて少ない。

ハルビンの母親は偉大な存在であることがわかる。しかし東京の両親像はどうか。「頭がいい」は父親42%、母親30%と大差で父親が評価されている。「あたたかい」は母親、「やさしい」も多少母親が評価され、父親像

表26 親はどうしてくれる

			(%)			
			東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
友だちの持ち物をほしいと言ったら	買って くれる	きっと たぶん	11.0	(13.1)	8.0	<u>6.4</u>
			37.8	51.6	24.1	38.3
	小 計		48.8	64.7	32.1	44.7
食べたいおかず	作って くれる	きっと たぶん	30.5	(38.9)	20.7	<u>17.0</u>
			52.3	51.3	55.1	59.6
	小 計		82.8	90.2	75.8	76.6
誕生日のごちそう	作って くれる	とてもたくさん	52.4	(60.0)	<u>49.4</u>	57.2
		いつもより やや多く	36.4	33.9	34.8	28.0
	小 計		88.8	93.9	84.2	85.2
誕生日のプレゼント	くれる	とてもよいもの	56.1	<u>10.7</u>	(73.4)	67.3
		わりとよいもの	30.1	41.1	21.2	31.1
	小 計		86.2	51.8	94.6	98.4

と母親像は接近してはいるものの、やはりかつての性役割に支えられたイメージが残っている感じがする。

こうした親子関係は、先生や友人関係と比べてどうなのか。表29、図9を見よう。「親・先生・友だちから嫌われている（かわいがってもらっていない）」と感じているかどうかをたずねてみると、「まったくそう思わない」とする強い否定を示す子の割合は、図9に示したように東京でもハルビンでも、親>先生>友だちの順になっており、親からは一番愛され、次に先生、最後に友だち、という順で人間関係の中での受け入れられ感が強いことがわかる。人の安定のための親子関係の

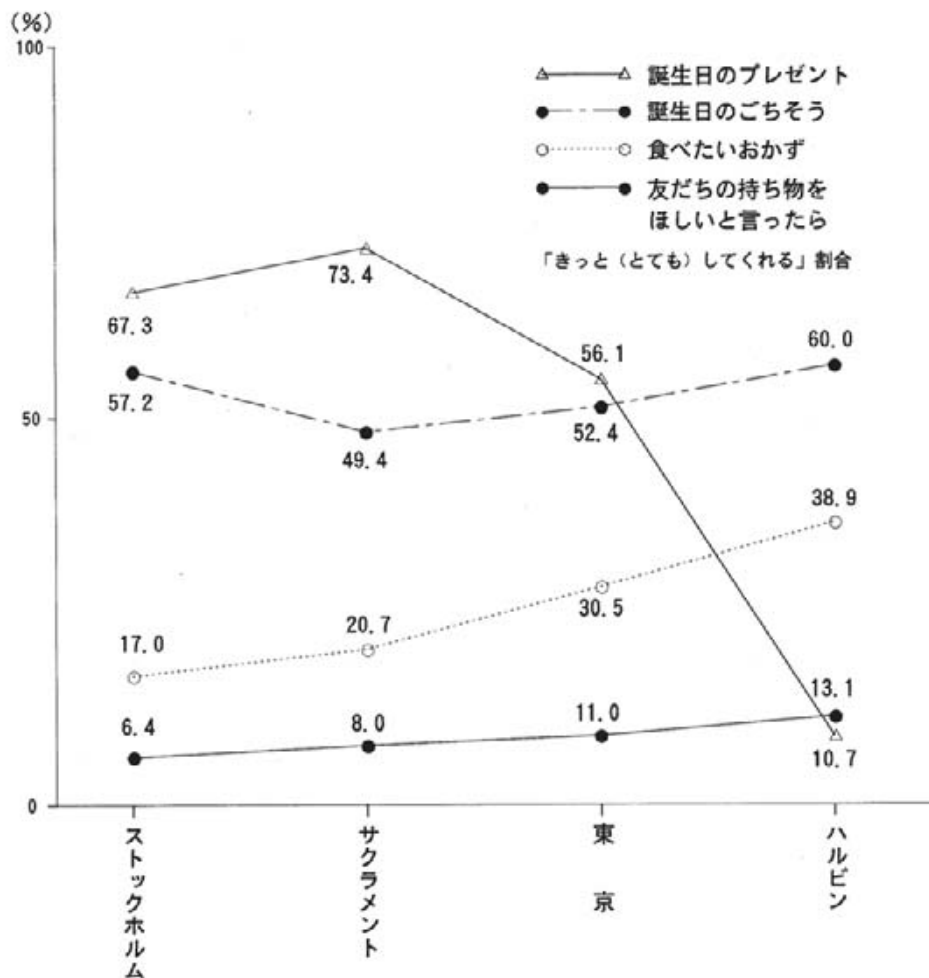
大切さがよくわかる。

そしてこれを東京とハルビンで比較してみると、図が示すように、両地域には2倍近い数値の開きがある。ハルビンの子で「親からかわいがられていない」を強く否定する者は86%もいるが、東京では53%でしかない。「先生がかわいがってくれない」では数値は両地域で一層大きくなり、ハルビンでは強く否定する者が64%だが、東京では33%でしかない。

人間関係の中の安定は東京よりハルビンの子に大きいものがありそうだ。

以上をまとめてみると、ハルビンとストックホルムの子どもの家庭内での対照的な成長ぶりが印象的である。国中が一人っ子の

図7 親がしてくれるか



社会の中での成長。それは2人、3人の兄弟のいる環境の中での成長と大きく違ったむずかしさをもっているのだろう。むしろ親子関係のあり方には歴史的文化的な伝統の基盤もあるだろうが、その上で、期待と保護を含めて子育ての競争が一層過激に行われる条件の中で子どもを健やかに育てていこうとするのは、並大抵のことではなさそうだ。表25、図6に、示されたように、一人っ子社会の子どもは親を「自分のことを何かにつけて心配してくれる」親と受けとめ、表27にあるように極めて高い両親評価をする。そして表26にあるように、「自分のわがままもきいてもらえるだろう」と考える。それを信頼関係の

十分な親子と表現してよいのか、関係が密着しすぎ相互に自立できない親子と表現するほうが適切なのか。5年生という年齢と他の地域での数値とを考えあわせると、とりあえずは後者の見方だろうか。とってストックホルムのデータが示すような、相互に自立した、またはふつうの人間関係に近い(冷たい)親子関係も日本人にはなじめない。しかし北欧の人びとに言わせれば、東京のデータもハルビン同様、異様なものと感ずるかもしれないのである。親子関係はそれ自体1つの文化であることを痛感させられる。

表27 父母の人柄 (東京-ハルビン)

		(%)				
父 親	頼れる	やさしい	頭がいい	尊敬できる	あたたかい	
東 京	50.0	42.8	41.8	38.4	37.6	
	∧	∧	∧	∧	∧	
ハルビン	60.7	71.8	66.9	72.9	74.6	

		(%)				
母 親	頼れる	やさしい	頭がいい	尊敬できる	あたたかい	
東 京	50.8	44.4	29.8	38.6	45.9	
	∧	∧	∧	∧	∧	
ハルビン	70.4	92.4	62.0	82.2	87.1	

「その通り」の割合

図8 父母の人柄

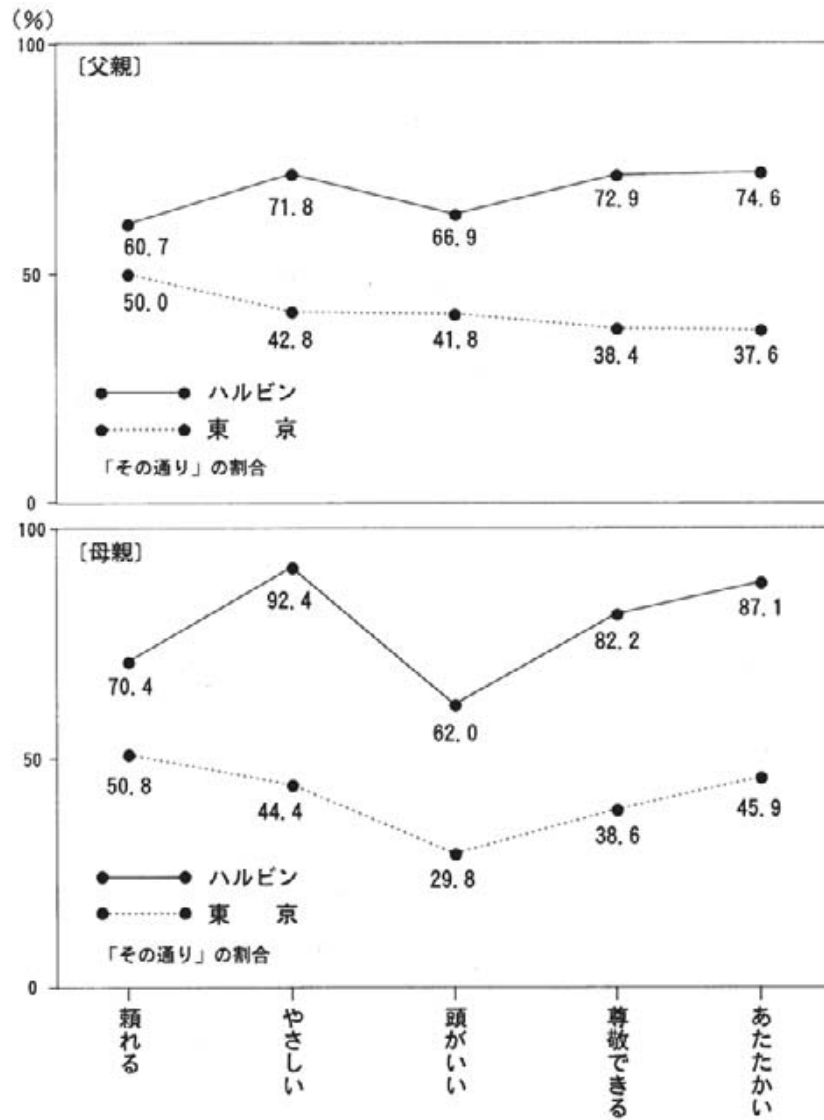


表28 父母の人柄（父親－母親）

(%)

		頼れる	やさしい	頭がいい	尊敬できる	あたたかい
東京	父親	50.0	42.8	41.8	38.4	37.6
	母親	50.8	44.4	29.8	38.6	45.9
ハルビン	父親	60.7	71.8	66.9	72.9	74.6
	母親	70.4	92.4	62.0	82.2	87.1

「その通り」の割合

表29 子どもの人間関係

(%)

		東京	ハルビン
友だちから嫌われている	いつもそう思う	4.4	1.4
	わりとそう思う	6.5	3.4
	たまにそう思う	26.3	14.6
	あまりそう思わない	35.9	22.1
	まったくそう思わない	<u>26.9</u>	<u>58.5</u>
先生がかわいがって くれない	いつもそう思う	11.0	2.7
	わりとそう思う	7.3	3.1
	たまにそう思う	15.6	13.1
	あまりそう思わない	33.6	17.1
	まったくそう思わない	<u>32.5</u>	<u>64.0</u>
親がかわいがって くれない	いつもそう思う	3.6	2.0
	わりとそう思う	5.0	1.1
	たまにそう思う	12.2	4.4
	あまりそう思わない	26.7	6.9
	まったくそう思わない	<u>52.5</u>	<u>85.6</u>

図9 人間関係の中で

